

た。当研究会により学者と政府、ビジネス界、財界、新聞雑誌界、NGO機関、その他の分野の優れた専門職の人材がハーバードに集まることができる。彼らは一学年を通して、個人的研究を行い、ハーバード大学の教員と学生、他にはCambridgeとボストンのコミュニティとの間で行われている意見交換に参加する。ポスドク奨学金プログラムは毎年、人類学、経済学、歴史学、政治学および社会学分野からの数名の優秀なポスドクフェローの研究をこの研究プログラムでサポートしている。

(ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所教授)

原文…英語

翻訳…鐘以江(同志社大学一神教学際研究センターリサーチフェロー)

学際研究ネットワークの中の日本研究——チュールリッヒ大学 重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の事例を中心に

ラジ・クリスティアン・シュタイネットク

(一) はじめに

日本研究は人文学の中でどのような位置を占めているのか、また人文学に対してどのような

貢献ができるのかについての考え方は、ここ数十年で大きく変わってきた。日本研究という学問分野は、一九世紀の大学において、日本という一つの国の歴史と古典を研究し、記録・保存する企てとして創始されたものだが、日本人の国民性を探ることが研究の中心となり、人文学が社会科学のアプローチの波に洗われるようになって以降も、その思考パターンがまだ存続している。

そのため、日本国内における日本研究と、海外の日本研究の間に、一つのはっきりとした違いが生じた。日本人による日本研究は、自分と密接な関係にある対象を研究するという閉鎖系の中で、日本国民のアイデンティティーの探求と国民的記憶の保存に向けて研究理念が方向づけられ、豊富な原資料の多様さゆえに、研究者の考えにもかなりの相違が見られる。一方海外の日本研究は、自分たちとは異なる文化の《他者性》を考察するというスタンスとなり、問題意識も使用する資料も、そのパラダイムに影響される。また大学内における日本研究の地位は、日本が、世界の政治・経済大國間に占める地位に応じて変動するきらいがある。

しかしグローバル化による統合が進み、パワー構造が多極化し、国民国家という括りを越える動きも見られるようになってきている今の世界にあつては、日本研究は、日本の内外を問わず、その学問的位置づけと将来の可能性について、ある程度の見直しがなされても悪くない状況にあると思われる。本論は、二〇〇六年にスイスのチューリッヒ大学で採択された、アジアとヨーロッパの文化的・社会的交流についての学際研究プログラムを一つの事例としながら、日本研究を現代の人文科学の一部として組み入れようとする際に、どのような問題があるのか、どのような目的意識と専門性が必要とされるのかについて、実際の経験に基づいて論じたものである。

(二) 全体的な流れ…国民性研究から人文学研究のネットワークの中へ

何のために日本を研究するのかという問いに対する近代の典型的な答えは、近代の国民国家的発想に基づく文献学のパラダイムを反映し、研究者のナショナルイデオロギーによって大きく異なった。もし研究者が日本人であれば、「日本の歴史、文学、宗教等の文献によって、過去及び現在の日本文化についての知識を構築し保存するのは、われわれ自身を知るため、日本人であるわれわれは一体どのような民族であるのかを知るためである」という内向きの問題設定となった。そこには、研究者と研究対象が共に主体で、研究者は研究対象を学ぶことによって、つまり研究対象を通じての自己理解によって自己形成を行うという循環回路が確立されている。その研究成果が国民に伝えられるときにも、国民も同じ感覚でそれを受け止めてくれるはずだという、公然たる、ないし暗黙の想定があった。研究者の重要な任務は、文学、思想、宗教、芸術の「正典」を編纂することによって、時間を超絶した「想像の共同体」である国民国家の形成に寄与し、現代の日本人と「自分たちの過去」とを繋ぐ尽力をすることであった。

一方、自分を日本人とは思わない（思えない）海外の日本研究者は、こうした親密圏からは締め出されていた。彼らが日本の歴史を辿り、代表的な文献を読むのは、奇異とまでは言わずとも、「異なる」対象、つまり日本の《他者性》をよりよく理解するためであった。日本を何年、何十年研究しても、彼らは畢竟《外部》の観察者に留まる。そうなるも研究の意義も社会的効果も、その《外部性》を帯びてくる。研究から得られた知見は、ある《他者》についての知識として位置づけられ、研究者の属している社会の自己理解に直接裨益することはない。日本の歴史、文学、宗教、社会についての研究は、その研究者の大学や国で奉じられている、歴史、文学、宗教、社会一般についての概念や、またそれらが依拠している理論に、深い影響を

与えることなどは最初から想定されていないのである。

日本人研究者と外国人研究者に共通するのは、《日本》というものが、時間を超越したある本質を帯びていて、日本人、日本美術、日本の宗教といったようなものの意味を規定しているという、日本研究に構造的に根づいてきた信念である。《日本的なるもの》の研究成果は、《日本》と日本の様々な伝統の特殊性に対する情報や知識を増加するが、美術一般、宗教一般の理解を豊かにしてくれるというわけではない。日本が、歴史的、地理的、社会的、言語的、その他様々な文化的差異を超越した本質を有するという《日本本質論》とでも呼ぶべきこうした思考様式は、学問上の考え方にすぎないと思われるかもしれないが、実はその力をもっと構造的に働いており、大学の学部や研究所や研究誌等の構造に入り込むことによって、日本研究のありかた自体を決定しているところがある。そうした体制に埋め込まれている限り、《日本本質論》に伴う諸問題を批判的に考察しても、その批判自体が、《日本本質論》という支配的なパラダイムの中に、うやむやの裡に取り込まれてしまう。事実に基づき、説得力ある方法論的を以て《日本本質論》を批判しても、その批判が訴える力を持つのは、《日本本質論》に意図的に加担することをよしとしない一部の日本研究者にすぎず、大半の研究者たちは、相変わらず、日本の自己イメージ作りや、ポストモダン風の差異や多様性への偏愛を加味した文化的な境界線作りに協力している。そうしたこともあって、多くの研究者が引き寄せられ、政治的な支援が与えられるのは、まだ《日本本質論》的研究の方になっている。

したがって、こうしたことの責めを、国家的な文化政策や研究機関の保守的体質にだけ帰するのは安易に過ぎることになる。卑見では、この《日本本質論》——それは《日本特殊論》に繋がっている——のパラダイムは、三種の研究者集団にとって魅力的であり続けている。一つ

は、日本の歴史、社会、文学等の研究を通じて、日本人の自己理解や「国民の歴史」の保全に寄与していると思っている日本人研究者たち。もう一つは、日本が例外的な国であるということになれば、文化構造的に親近性があって理解しやすい古代ローマ研究、ドイツ研究、アメリカ研究に比べ、稀少な情報へのアクセス権を持っているという付加価値が認められると同時に、他の地域研究が対応を迫られている方法論的要請の圧力を少なくとも部分的に免れることができる、国外、特に西洋の日本研究者たち。そして最後に、日本が特殊で例外的な国であるということになれば、日本を研究対象から外したり、あるいは日本関連事項を自分の研究に組み入れるにしても、「日本では」という欄外的な扱いに留めたりして、日本を、それぞれの研究に標準的に求められる基本用語や前提に対する挑戦と見なさずに済む利便を得る、日本国外の、社会学、哲学、歴史学等の人文・社会科学系研究者たちである。

ここで、一九八〇年代後期以降、大学院で日本研究を学修後、伝統的専門分野への転出を試みたヨーロッパの日本研究者たちの経験が参考になる。彼らの多くは、日本の文献や資料を従来の専門領域——筆者やチューリッヒ大学の同僚たちの場合、哲学と社会学——に導入して、その分野で研究を継続し博士号を取得した。しかしその後は日本研究を続けようとしても、往々にしてキャリア・パスが閉ざされているため、相当数が再び日本研究に戻ってきている。このことは、二度心変わりをしたというよりも、日本研究を従来型の学問分野に持ち込むことの難しさに対する現実的な認識の結果として捉えられるべきである。従来型の学問分野の研究者たちは、日本研究に馴染みがなく、日本の文献や資料についての専門知識を共有しておらず、学術的スタイルにも相違があつて、彼らの世界に日本研究を持ち込もうとしても、なかなかうまくいかないのが現実なのだ。

しかし、日本研究者たちのこうした集団的経験は、いろいろな意味でヨーロッパにおける日本研究の状況を変える契機にもなった。一つには、方法的な厳格さと、様々な分野で議論されている大きな理論的問題への意識が高まったことが挙げられる。逆に言えば、これまでの日本研究の総論的アプローチや、ただ日本的なるものを興味のために提示するだけの研究は、それほど高い評価を受けなくなってきたということでもある。一方、やや逆説めくが、日本研究の成果を他の学問分野に導入しようとすることによって、「日本研究」の特色のある知識の重要性が引き立つようにもなった。これらの変化は、いずれも、中・長期的な学際的ネットワークの構築に向かう動きを促進するものである。近年始められた二つのプログラム——チューリッヒ大学の重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」とハイデルベルク大学のCOE「グローバルな文脈におけるアジアとヨーロッパ」——は、まさにそうした学際的ネットワーク構築の試みになっている。

これらのプログラムには、日本研究を変えたもう一つの動きもはっきりと反映している。それは、中国、韓国、南アジア、東南アジア、さらにはイスラム圏といった地域との比較研究や研究協力を奨励することによって、日本研究をより大きな地域研究のネットワークの中に組み入れようとする動きで、ここ二〇年の間に、欧米と日本の一部で顕著になってきている。

日本研究を東アジア研究の一部に組み入れ、国家の枠組みを超えての、長い連続的な社会的・文化的流動を見ようとする新しい意識は多とするに吝かではないが、少なくとも西洋の日本研究においては、アジア全域を強調することには負の側面も伴う。多くの大学が、学術的教育の広角化という観点から、日本研究、中国研究、韓国研究、東南アジア研究といった比較的狭い地域の個別研究を「アジア研究」という名のもとに統合してきたわけだが、研究対象を拡

張する裏で、言語教育、特に前近代のアジアの言語の教育が周縁化されるようになってきている。古語の教育、そしてそれに随伴する古典教育を削減し、広域の現代社会についての教育に置き換えようとする傾向は、科学・教育の経済的効率化という現在の行政方針に沿うものとなっている。しかしこれについても、責めを政治家や大学の執行部にだけ負わせるのは公正とは言えない。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて広まった、文献学的な《国民性本質論》という近代の古典的パラダイムに対し、やや変則的な形でではあるが、世俗的、反エリート主義的な批判が加えられるようになってきたことも無視できない要因である。近代のイデオロギー的な《国民性》への批判によって、日本研究は、日本特殊論というような狭隘化した文化的視点を乗り越えることができたのだが、その陰で、近代以前の日本についての、日本の《国民精神》を最もよく体現しているとされる《古典》の研究の価値を貶めてしまった。古典研究の価値のアプリオリな承認が失われてしまうと、なぜ日本研究をしなければいけないのか、なぜ日本研究に財政的、精神的な投資を行う必要があるのかという疑問が再び頭をもたげてくる。研究者は、大体言い訳めいたことしか言えなくなるし、学生は、そうした疑問に対し大半が同調してしまふ。ただ学生の否定的反応をそれほど深刻に受け止める必要はないかもしれない。というのもヨーロッパでは、高等教育を受ける人口比率の増大によって、どの分野においても学生の絶対数は増えてきており、しかも一九八〇年代以降、西洋においてアジア研究に対する人気は高まっていて、前近代の日本に関心を持つ若い研究者数は、増えこそすれ減ってはいないと推測されるからである。大学においても経済的視点が幅を利かせ、何につけても数量がものを言う情勢になってきており、学生数が一定数に満たない研究領域は、あっさり廃止されかねない。研究面も同様で、その研究がどれだけ社会的有用性を持つかが、予算配分の大き

な係数になっており、これも「純学術的」な前近代の日本研究にとつては逆風である。さらに予算は定常的部分が削られ、競争的予算に回されることが一般的となり、その大部分が、「先端的」で、社会的関連度が強く、国際競争力のある、脚光を浴びやすい名辞を連ねた研究プログラムに与えられる傾向がある。したがって日本研究者たち（特に、前近代の文献学に依存する日本研究者たち）は、こうした全体的な流れを意識して、研究と教育に社会的連関性を持たせるための戦略としても、研究及び大学院教育において、他の学問領域との安定した協力体制を築くことを真剣に考慮すべきである。

以上、日本研究を取り巻く一般的状态について個人的な考えを述べてきたが、次にチューリッヒ大学の重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」における私たち自身の経験を述べてみたい。

(三) 日本研究とチューリッヒ大学重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」

チューリッヒ大学の理事会は、二〇〇五年に、人文学部、法学部、理学部、神学部の一団の研究者たちの申請に基づき、重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ・文化、宗教、社会における《授受》と《線引き》のプロセスと問題点」を承認した。当初予算として、ゲベルト・リュフ基金からの二四〇万スイス・フラン、年間予算として八〇万〜一六〇万スイス・フランがついた。神学と中国研究、歴史学と地理学、イスラム圏研究と民法といったように、これまではかけ離れていると考えられてきた領域の研究者たちが定期的に集まり、ディスカッションと協力を行うためのフォーラムを形成し、その対話の中から学際的な研究協力を発展させていくというのがプログラムの趣旨である。最初に二つの基本的戦略が定められた。第一にプロ

プログラムの研究範囲を、特定の狭い領域に限定せず、いろいろな問題意識や目的に対して広く開口を保っておくこと、そして第二に、潤沢な予算の大部分を、博士課程の学生やポストドクターの研究に割り当て、学際研究に対する高い能力と感性を有する若手研究者の育成を図ることである。さらにもう一つ戦略と言ってもいいのは、主にアジアからの著名な外国人研究者——例えば二〇〇七年には日本から思想家の三島憲一教授——を、講演者や客員研究員という形で招き、プログラムの最初から、異領域間だけでなく、アジアとヨーロッパの研究者間の対話の文化を培い、アジアを自らの理論的な声を持たない客体として扱う弊風をできるだけ脱却するよう試みたことである。

最初の数年間、プログラムに携わった研究者たちの主な仕事は、プログラムに応募してきた若手研究者の研究計画を審査し、採用した研究者に、それぞれの分野の専門家が助言をすることであった。週一回の定例研究会では、各研究のプレゼンテーションと、それについてのディスカッション、また定期的に催される講演会では、招待した研究者の講演に続いて真剣な質疑応答が行われた。このプログラムの最初の日本研究関係のプロジェクトは、一九二〇年から一九七〇年にかけての日本の「知識人」という概念の歴史を論じたポストドクター研究で、後で大部の研究報告に纏められた。内容は、知識人の社会的機能についての大正期の議論が、一九五〇年代と一九六〇年代においてサルトルの知識人論に触発された日本での議論で用いられた概念範疇をすでに用意していたことを論じたものであった。もう一つの日本研究関係のプロジェクトは、法学部が主体となって、ヨーロッパと日本における、「プライバシー」「自治」「不道德」といった概念の比較と、それがセックス産業の契約に対して有する関係の比較を行ったものである。これらのプロジェクトは、「イランにおける麻薬政策のディスコース」（イ

スラム圏研究)、「スイスのインド人移民第2世代の《インド性》」(民族学)、「現代中国における《信頼》の概念」(中国研究)、「現代のタイ映画」(映画研究)、「アジアとヨーロッパにおける《自然》と《自然保護》の概念」(地理学)といったテーマのプロジェクトと併行して実施されたものである。

最初の数年の成果としては、次のようなことが挙げられよう。注目度の高い講演や会議を通して広義のアジア研究に関心を集めてきたこと、意想外の領域間に関係性を確立したこと、異なる研究文化を持つ専門領域間での対話と相互理解を増進し、同時に粘り強さを涵養したと、そして、このプログラムでなければ出会えなかったような分野での課題上・方法上の予期せぬ洞察をしばしば得たことなどである。

一方で、時間の経過とともに、プログラム当初の設計では、厳しい構造的限界があること、長期に互って実のある研究を継続していくためには、プログラムの統合性を強化し、焦点をもっと絞る必要があることが明らかとなった。プログラムに携わる研究者たちの参加と支援は、自分たちの抱えている若手研究者への助言と、新しいプロジェクトが検討され採択される会議への出席以上にあまり出ない——つまり、資金獲得のための機会としてしか見ていない——場合がかなり見受けられた。また内容に関しても、様々な領域間の対話を通して生み出される思いもかけぬ洞察が、大きな財政的、心的投資を正当化するだけの価値を持っているとは、なかなか認めてもらえなかった。

そのようなわけで、プログラム開始当初こそ奏功した、テーマを限定せずオープンにしておく方針は、三年目にはすでに行き詰まりを見せるようになった。二〇〇八年には外部評価が実施され、プログラムの基本コンセプトは認められたものの、組織についても研究課題について

も、もっと体系化するようにとの指摘がなされた。それに対応するため、プログラム構成員による会議や大学理事会の審議を経て、二〇〇九年から博士課程に、「アジアとヨーロッパ」という、学際性を強調した特別なプログラムを設けることになった。そして研究課題の体系化に対応すべく、三つの学際的テーマ——①概念と分類^(三)、②交錯する歴史^(四)、③規範と社会秩序^(五)——を共同研究の基軸として設定することが決められた。日本研究の教員もこれらに加わり、特に①と③では、指導的な役割を果たしている。次節では、筆者自身が継続して携わり、二〇〇九年から二〇一三年にかけてコーディネーターを務めた、①の「概念と分類」領域の研究について、その経過を述べることにする。まず研究課題と研究活動について簡単に説明し、次に、その中で日本研究の占めた位置と役割について、幾つか所見を記しておきたい。

(四) 研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の「概念と分類」プロジェクトにおける日本研究と共同研究

「概念と分類」という研究領域は、アジア研究、神学、宗教学の研究者たちが共有している意識——われわれが何かを研究しようとして物事を特定したり分類したりする際に使う種々の「カテゴリー」は、大体においてヨーロッパ起源のものであり、ヨーロッパの文化史に固有の概念だという前提で使われているのではないかという意識——から生まれてきた。研究の具体的な作業としては、プロジェクト研究者の多くが、古代から中世にかけての精神史の諸相を調査し、近代ヨーロッパの植民地主義的な意識によって、政治的、学術的な分類法が固着してしまう以前の、「哲学」や「宗教」、あるいは「宗教哲学」としてカテゴリー化されたものの元の姿を探ろうとした。無論、こうした近代のカテゴリーには実質がないわけではないが、カテゴ

リー化によってどのような影響が生じるかに配慮することなく、安易に使われてきた気味がある。さらにそのカテゴリー化は、制定時においても、該当内容が適切に吟味された上でグループ化されたとは言えない上に、長期に亘る世代間の伝達の中で、解釈し直されていくことによつて、次第に現実にもぐわぬものになってしまっている。われわれの研究グループの課題は、こうした基本概念について、様々な学術領域で行われてきた批判的議論を見渡し、それらを、関連する代表的な「古典的」文献の概念枠を再構成したものと比較対照しながら、流布している分類法の相対的な歪みと影響をより深く理解することである。われわれはまず「哲学」から始めることにし、定例研究会とは別に、二〇〇九年秋には「古典的テキストの哲学的読み」に関する最初のシンポジウム、二〇一〇年春学期には一連の招待講演会、秋学期には「概念と分類」グループ内の研究者による連続講義、二〇一一年一月には四日間を亘る国際会議を開催してきた。グループ内の研究者間で最初の現状分析を行い、それをアジアや欧米の日本研究者たちと検討してより精緻なものにし、さらにこれまで協力してきた海外の研究者たちの見解を盛り込みながら、最初の研究成果を出すというのがその趣旨である。国際会議は、研究成果の公刊準備のよい出発点となった。現在は、古代から現代に及ぶアジアの伝統と文学に見られる「哲学」概念についての二巻の研究書の上梓に向けて鋭意努力しているところである。

われわれの最初の発見の一つ——そしてそれは、多岐に亘る影響という点で、このプログラムの学際性によつて可能になった最も重要な洞察の一つである——と私は信じている——は、われわれは、古代から中世にかけてのアラビア、中国、インド、日本のテキストに西洋の「哲学」の概念を適用するのは無理があるという共通認識を持っていたのだが、実際に適用してみている問題には、テキストによつて大きなバラつきがあるということだった。その原因として

は、アジアの社会では、思想や知識の領域における社会的な組成と認識上の組成において、地域によって様々な相違があるということ、そしてアジアの文献がヨーロッパ／西洋の学問世界に移植される際の歴史的環境に違いがあったということなどが考えられる。後者の歴史環境上の差異については、例えば、「中国の古典的哲学」と「伝統的な日本思想」について、われわれヨーロッパ人がどのような観念を懐いているかを比較してみると特に明らかになる。

「概念と分類」プロジェクトに対する日本研究の関与は、二つの方向に沿って組織された。一つは、古代仏教思想家の空海と中世仏教思想家の道元の哲学的テキストの批判的研究を通して、彼らの著作において機能している、知識／信念に関する内容に相応しい再カテゴリー化を行うこと、もう一つが、ヨーロッパ人が懐く、近代日本の哲学概念の研究と、西洋において《日本哲学》に纏綿するイメージの解析である。前者については、関連したプロジェクトで、空海と道元のテキストにおける、説得力を生むための修辞法と、言語の概念化について分析的な研究が行われた。⁽⁸⁾ 後者に関しては、日本の研究者たちと共同で、この種のものとしてはドイツ語では初めての出版となる、日本のアカデミックな思想についての研究書——近代から現代にかけての、思想上の学派（カント派から実存主義まで）や論点（社会思想から心身についての思想まで）についての概観と、個別の思想家についての精細な論考を組み合わせたもの——が二〇一四年の三月に刊行予定である。⁽⁹⁾ また一つのPhDプロジェクトでは、西田幾多郎の哲学における主体・客体の超克という概念が批判的に考察された。⁽¹⁰⁾

われわれの研究は、プロジェクト・チーム内、及び諸会議における招待者や講演者とのディスカッションに多くを負っている。こうした学際的対話から生まれた洞察のうち主要なものを幾つか記しておきたい。一つは、前近代のインドにおける知識世界の認識カテゴリーとの比較

の中で、社会構造が知識世界の区分けに関与してくる——すなわち、概念のカテゴリー化に際し、社会的構造が、カテゴリーの意味と妥当性に影響を及ぼしてくる——ということが判明し、この分野の研究において、当該社会の社会構造を理解することの重要性が明らかになってきたことだ。もう一つは、「中国の古典哲学」に対し西洋人の懐く観念に關してのデイスカッション——特に孟子や荀子の社会的地位と機能についての、社会言語学者ロバート・ガスマン教授の批判的考察——を通じて、こうした古代のテキストに現代的な意味での「哲学」というラベルを不用意に適用することは、たとえそれが温和なものであっても、いろいろな概念的歪みを生じることがはっきりしたことである。「哲学」という概念は、近代においてなぜこのように、一方では強い適用欲求を生みながら、他方では適用に慎重であろうとされるのだろうか？それは、「哲学」というラベルの持つ資格（価値）認定機能に關する問いである。こうした問題意識は、最初宗教学の中で、「宗教」という概念と用語について向けられるようになってきたものである。

この視点は、日本において受容され発達してきた「哲学」概念の研究にとっても有用である。前近代の日本思想のテキストのどれを「哲学」というカテゴリーに入れ、どれを入れなかったかを調べていくと、西洋の“philosophy”が普遍概念としての規範的な連想を強く帯びているのに対し、「哲学」は、その適用において著しく日本化され、過去を引きずる「経路依存性」を呈していることがよく見えてくる。そしてそのことが、世界全体の哲学史、特に日本の哲学史の姿と理念を歪ませる原因になっている。またわれわれの研究チームは、古典的な日本の思想テキストに、“philosophy”の代替となる何かが可能していることを認め、その幾つかを西洋語で把捉し、価値評価をすることができた。

このように、専門領域や地域の壁を越えた研究協力は、大きな成果を生むのであるが、一つここに指摘しておくべきは、これまでのところ、学術的な哲学分野との相互乗り入れはごく部分的なものに留まっているということだ。二〇一一年一月のわれわれの会議に哲学研究者が何人か出席したのだが、その後も恒常的に協力してくれる研究者を得ることはできなかった。その原因の一つは、チューリッヒ大学の哲学科が分析哲学のパラダイムに強く傾斜していること、もう一つは、われわれの研究成果の妥当性を哲学領域の研究者たちにもアピールし得るだけの研究業績がまだ十分に蓄積されていないことだと思われる。

二〇一一年一月の会議以後、われわれのチームの定例研究会の焦点は「宗教」の概念の方に移っていった。「哲学」の場合と相同のプロセスに従い、まずチーム内部でディスカッションを重ね、それを踏まえて二〇一一年の秋学期に招待研究者による一連の講演会を開催し、それから二〇一二年一月に大きな国際会議を開いて、チーム内研究者と外部からの研究者がそれぞれの研究発表を行い、その結果をまとめた刊行物が目下準備中である。さらに研究と教育における対話を活性化するため、日文研の磯前順一准教授を客員教授として招聘し、セミナーでのポスト・コロナ理論の講義と、アジアにおける宗教の概念についての、宗教学と日本研究の共同セミナーへの参加を依頼した。磯前教授の招聘によって協力の輪が広がり、理論的な議論も拡大して、その効果は今日まで続いている。

哲学の場合と好対照に、現代の学術的な「宗教」の概念が、近代西洋以外のところでは文化的カテゴリーとして適用できるかどうかを巡り、ここ数十年來、宗教関係の研究者の間で熱い議論が交わされてきた。われわれのプロジェクトにもそれが反映し、研究者の参加意欲は旺盛で、理論面で意義ある成果を得ることができた。プロジェクト・チーム内部でのディスカッ

シヨンは、非西洋・前近代のテクストにおける「宗教」関係概念の枠組みを再構成するための研究方法について合意を形成する作業が中心となった。その際に、先の「哲学」概念研究の経験が役立った。また中国語研究者のヴォルフガング・ベール教授による、有名な「大秦景教碑」を題材にした一連の研究会での、ただ「宗教」「教」「道」といった広いカテゴリー用語だけでなく、「寺」「僧」「師」のようなもっと具体的な宗教関連用語についても相応の注意が払われるべきだという説得力ある主張も大変有意義であった。一年間に互る真剣な議論を通して、われわれは共通の課題と方法論を発展させることができたが、一方で、この研究領域に若手研究者を呼び込むことでは苦慮している。日本研究関連プロジェクトとして、山片蟠桃が当時の伝統的知識体系に対して持っていた評価に関する研究を一つ獲得することができたものの、予算付きのPhD研究の公募にはほとんど反応がないのが現状である。若い研究者からの率直なフィードバックがあまりないので、この不人気の理由を客観的に判断しにくいのだが、仄聞するところでは、二つのマイナス要因が作用しているようである。一つは、自然科学系の研究者と違って、人文領域におけるPhD研究は、少なくともヨーロッパでは、自分でテーマを選び、自分の関心に相応しい方法論を用いるのが伝統的だと思われていて、既成の研究構想に従うのは一般的ではないこと、もう一つは、現在の学術環境においては、若手研究者は、近代以前に関するテーマや、概念史といったような抽象度の高いテーマを研究対象にすることを躊躇する傾向があることだ。こうした風潮については、当面即効性のある対策はないが、中・長期的対策として、日本研究の中に共同研究の文化を育んでいくことが大切だと考えている。全体に課せられたテーマと方法論の枠組みの中で、研究チームが緊密に協力し合いながら研究を進めていくという組織体制づくりが大事で、それを欠くと、現在の学術に要求されている高

度な分析レベルに達するのが難しくなり、文化の基本的カテゴリーの歴史的再構成といったより大きなテーマについて、実のある成果を出すことはほとんど不可能になってしまった。

以上、チューリッヒ大学重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の中の、「概念と分類」領域における、日本研究チームの活動と経験について概括的に述べてきたわけだが、最後に「交錯する歴史」「規範と社会秩序」の二領域についても、日本研究との協力関係と併せて、少し触れておきたい。例として、領域ごとに三つずつ研究テーマを挙げておく（括弧内は主担当となる専門領域）。

第二研究領域「交錯する歴史」

- ① 「近代美術」——一九〇〇年頃の日本における西洋概念の芸術の受容（ザンクト・ガレン歴史民俗博物館（スイス）の明治期コレクションを中心に）（東洋美術史^(二三)）
- ② ナショナル・アイデンティティを超えた地母神たち——二〇世紀初期の仏画の日印美術交流と英国ラファエル前派の〈精神性〉と〈感受性〉の概念（東洋美術史^(二四)）
- ③ ナショナル・アイデンティティと一九世紀日本の見た西洋像（歴史^(二五)）

第三研究領域「規範と社会秩序」

- ① イスラム的東洋像・日本、中東、西洋のイメージ比較（イスラム圏研究^(二六)）
- ② ポスト福島の大原発運動の社会学的分析…「放射線被曝から子どもを守る会」のケース・スタディ（日本研究^(二七)）
- ③ メディア・セクターと日本社会に対するニューメディアの影響…ポスト福島の場合と大原発運動（日本研究^(二八)）

第三研究領域の②と③は、「国境を越える社会的プロテスタトと政治紛争」というテーマのより大きなプロジェクト研究の一部であり、社会地理学、南アジア研究、イスラム圏研究の研究者也参加している。このように、日本国内における社会的プロテスタトや政治参加の問題を理解するにしても、経済、メディア、コミュニケーションのグローバルなネットワークの中で理解していく必要があるというふうに認識が変わってきており、日本研究も、そうしたネットワークの中しっかりと組み入れられているのである。このプロジェクトを中心になって企画したのは、チューリッヒ大学の同僚であるダヴィド・キアヴァッチ教授で、現在は教授がこの分野のプロジェクトの取りまとめ役となっている。

このように日本研究は、重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」の中の二つの主要研究領域の企画と実施において主導的役割を果たしてきた。研究課題の全体的方向設定、方法的整備を行い、研究、教育、研究発表、出版のすべてのプロセスに実質的に関わってきたのである。このプログラムの全体的戦略は、アジアとヨーロッパの両大陸の研究者間の対話であるから、日本人研究者も定期的に招いて、彼らの研究成果や理論を、様々な領域の研究者たちと分かち合ってもらった。そうした協力関係の中で理論構築を行うことによって、われわれは、日本の「内」と「外」のこれまでの分断状況を多少とも乗り越えることができたと思っている。

(五) 日本研究にとって学際研究ネットワークが意味するもの

ここで、重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」のような学際的な研究協力が日本研究にとって持つ意味に焦点を当てて、一般的な視点から少し考えてみたい。

このプログラムによる目に見える効果ということでは、大学内での日本研究の立場がいろいろ

ろな意味で堅固になったことがまず挙げられよう。われわれの研究テーマや問題は、これまでには、文化的ナショナリズムの中で日本的なものに関心を持つ研究者の閉鎖的な世界にしか意味を持たなかったのが、ずっと幅広い層の研究者にも興味を持ってもらえるようになった。日本研究以外の研究者たちも、日本についての文献研究、ないし現地研究が、彼らが現在依拠している、一般理論上の様々な点についての見方を変える可能性を孕んでいることに気づき始めた。また今の時代には、自分たちの研究領域だけでなく、他の領域にも広く適用できる新しい方法論が求められていること、そしてそれを開拓していくための諸問題が日本研究によって提示されていることも認識されるようになってきた。一方日本研究の側も、緊密な学際協力の中から、日本研究の理論構築に向けての貴重な刺激を受けた。「アジアとヨーロッパ」プログラムでは、方法論上の問題が、議論構築のための共通基盤になるので、理論的、方法論的問題に対する構造的な強制力が懸かり、これまで《日本特殊論》についていつい陥りがちで、理論面での整備が遅れていた日本研究にとって望ましい効果があったと思われる。

もう一つの効果は、大学の組織改革への弾みを与えたことである。異なる領域間の緊密な協力関係の中で、これまで分断されていた東アジア学科、東洋学科、インド研究講座を統合する機運が生まれ、二〇一三年にアジア・東洋研究所が新たに発足した。この研究所は、全七講座で約八〇〇人の学生定員を擁し、人文学部の中でもメジャーな組織となった。それに伴い日本研究も、これまでのエキゾチックな位置づけから、人文学の重要な構成員として遇せられるようになった。その結果、学部の諸委員会、特に新規採用人事委員会への委員選出と発言力という点で、日本研究は大きく前進した。これからは、「一般倫理」「比較文学」「世界歴史」「社会学」といった社会・文化現象を幅広く扱おうとする領域の新規採用人事を行う際に

も、日本研究者たちの考え方がより大きく反映されるようになるであろう。

重点研究プログラム「アジアとヨーロッパ」に携わった個人的な経験を軽々に一般化する際には慎重でなければならぬが、このように長期に亙る学際的研究ネットワークに参加することは、前述したように、自分の研究領域の地位を強化する有効な戦略になり得ると言っているように思われる。研究自体に対するメリットも大きい。理論的に強化されるし、全体的に良い影響を受ける。もちろんその分、そこそこの負担増加は覚悟しなければならない。研究上のメリットを得るまでにはかなり多くの時間的投資を強いられる。特に主要な役割を担う研究者は、会議や研究会をコーディネートしたり運営したりする義務が増え、自分自身の専門領域から大きく離れた研究領域の問題にも馴染みを持つための努力をしなければならない。そしてこうした大きな学際的ネットワークの中で研究をする一方で、自分独自の純専門的な研究も深めていかねばならず、両者の間にどのようなバランスを取るかが苦心のしどころになってくる。学際化の潮流の中でも、自分の学術的専門性の堅固な基盤を持つことの重要性は変わらない。それがなければ、より大きな学際研究の課題への寄与も覚束ないものになってしまうだろう。

最後に日本人研究者や日本の研究機関との国際的協力について一言述べておきたい。この点についても、日本研究が、大きな国際的研究協力ネットワークの場に出て行くことは、全体として見ればプラスの効果を期待できる。そういう場に、日本人の（きわめて広義の）日本研究者が参加し、研究成果や理論を発表し、それに基づくディスカッションが行われれば、その情報は、日本研究の枠を超えた幅広い研究者たちにも共有されることになる。

長期的な効果という点では、翻訳の重要性を強調しておきたい。日本人の研究は、西洋語に翻訳されて初めて、西洋の他分野の研究者にとって十分に利用できるものとなる。外国人の日

本研究者のコミュニティーはあまりにも小さく、日本語文献の翻訳が行われることはまれである。特に、翻訳や学術文献の編纂といった地道な文献的基礎作業が、「独創的な研究」に比べて低く評価されてしまう環境にあつては、翻訳に対するインセンティブが低く抑えられてしまう。日本研究に関連する日本の研究機関が、それぞれの研究者たちの重要な研究を、翻訳の専門家によって西洋語に翻訳してもらうための相当額の子算を出してくれるようになれば、それは決定的な意義を持つことになるだろう。

(チューリッヒ大学文学部東洋学科長)

- (一) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/guestlecture/speeches-1/mishima.html>
- (二) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/terminated/japan.html>
- (三) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe_en.html
- (四) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten_en.html
- (五) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/normen_en.html
- (六) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/lectureseries/researchingphilosophy_en.html
- (七) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/conferences/whatsphilosophy.html>
- (八) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/associated/rhetorik.html>,
<http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/ongoing/japan3.html>
- (九) Steineck, Kaufmann, Lange: *Begriff und Bild der modernen japanischen Philosophie*. Stuttgart: Frommann-Holzboog, 2014. <http://www.frommann-holzboog.de/site/suche/detailansicht.php?wid=517000220>
- (一〇) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/begriffe/projects/terminated/japan_2_en.html
- (一一) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/lectureseries/religionsbegriffe.html>
- (一二) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/events/conferences/religionasia_en.html

- (一三) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/ongoing/conceptsofart_en.html
- (一四) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/ongoing/divinethothers.html>
- (一五) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/verflechtungsgeschichten/projects/associated/japan2.html>
- (一六) http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/islamicorient_en.html
- (一七) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/movement.html>
- (一八) <http://www.asienundeuropa.uzh.ch/research/normen/projects/ongoing/fukushima-1.html>

原文：英語
翻訳：南谷覺正（群馬大学教授）

フランスの研究所と大学システム

稲賀 繁美

「フランスの研究所と大学システム」というのが、編集部から頂戴した課題だが、組織の改変が頻繁かつ例外だらけで離合集散するフランスの行政組織の全体像を描くことは、もとより筆者の能力を超える。また試みたところで、数年のうちに無意味になるだろう。

筆者は二〇一三年五〜六月に *École pratique des hautes études (EPHS)* の招きにより、パリで一連の授業・講演を行った。招聘者は *Nicola Fiève*、日本庭園の研究者として著名だが、こ